

モザンビーク都市部における HIV/AIDS 治療実践

平成 17 年度入学
派遣先国：モザンビーク共和国
菅野 直美

キーワード：モザンビーク、都市部、HIV/AIDS、医療機関、NGO

対象とする問題の概要

南部アフリカは、HIV 感染者率が世界でもっとも高く、またその拡大率も高い地域である。モザンビーク共和国においてもその感染率は上昇しており、今後もこの拡大傾向がつづくであろうと危惧されている。

これまでの世界的な HIV/AIDS 対策では、予防と治療がその中心的課題とされてきた。予防に関しては、HIV/AIDS 教育に重きが置かれており、HIV 感染自体の予防や感染後の早期発見をうながす啓蒙活動が展開されている。治療に関しては、1990 年代後半に治療効果の高い抗レトロウイルス薬（ARV）が開発されたことによって、AIDS による死亡率と罹患率は減少した。これにより、HIV/AIDS は、医学的には「死の病」から「長期にわたって管理可能な慢性病」へと変化した。

しかしながら他のアフリカ諸国と同様にモザンビークにおいても、HIV 感染者/AIDS 患者（以下、感染者）が ARV 治療にアクセスできる機会は極めて限られており、HIV/AIDS は依然として「死の病」という性格を帯びている。このため、感染者の ARV 治療へのアクセスが、治療面で取り組むべき最終課題であるかのような様相を呈している。

研究目的

本研究は、国際機関や国際 NGO などによる医療援助が集中している、モザンビーク都市部の ARV 治療をおこなっている 3 つの医療機関を事例として、従来あまり焦点をあててこられなかった南部アフリカにおける治療の実践に注目し、その現状を明らかにするとともに課題を考察する。



写真 1 病院 A 外観

フィールドワークから得られた知見について

モザンビークの最南端に位置する首都マプトおよびその近郊にある、3つの HIV/AIDS デイケア専門公立病院において、医療従事者による感染者の診察・治療プロセスを観察した。また、病院敷地内において、通院している感染者を対象として治療や日常生活にかんする聞き取りを実施した。調査地における 2004 年の HIV/AIDS 感染率は 20.7% であり、中部に位置するソファラ州について感染率の高い地域となっている（2005 モザンビーク保健省）。

アメリカと現地の NGO の支援を受けている病院 A は、モザンビーク全土の公立医療機関を管轄しており、規模と設備の両面において、同国最大の総合医療機関である。病院 B は、スイスの NGO が運営協力にあたっている中規模の医療機関、病院 C は、イタリアの NGO が運営協力にあたっている小規模な医療機関である。調査期間中（2007 年 3 月～7 月）どの病院においても、ARV の不足という事態はほぼ観察されなかった。

調査の結果、感染者の症状や社会的背景に対応した柔軟で多様な治療実践が病院ごとに見られた。たとえば、病院 A では、私服の看護師が ARV を除いた医薬品を携えて感染者宅を訪問し、かれらの症状を確認して必要に応じて医薬品をその場で渡していた。また、病院 B では、重篤な感染者を自宅へ送り届けたり、感染者の HIV/AIDS に対する理解を深めて治療の効果を得られるように、ARV の服用方法を遵守する必要性を感染者に図解で説明したりしていた。病院 C では、感染者をソーシャルワーカーとして雇用したり、感染者に食糧援助をしたりして、感染者の日常生活を支援する取り組みが展開されていた。また、感染者が診察予定日に受診しなかった時には、感染者に電話をかけていた。



写真 2 HIV 抗体検査の様子



写真 3 治療の様子

予期せぬ感染によって医療機関を訪れた感染者の多くは、感染当初は非感染者による差別や偏見を怖れていたという。しかし、治療の過程で自らの経験を第三者に話すことによって、また、感染者同士の連帯を強めていくことによって、徐々に自らが進んで治療に取り組むようになった。マプトにおける HIV/AIDS の治療現場は、治療薬を与えるという物理的ケアのみを提供する場所から、精神的ケアをも

付する場所へと発展しつつあるといえる。これらの HIV/AIDS 治療実践に見られる細やかな配慮は重要な取り組みである。

しかしながらその一方で、これらの医療機関における治療実践により HIV/AIDS に対する認識が変化した感染者と、その経験のない人びとの間には、HIV/AIDS に対する認識のずれが厳然と横たわったままである。感染者の医療機関へのアクセスを制限する要因は何か、感染者は医療機関についての情報をどのように得ているのかを検討する必要がある。また、これらの医療機関は非感染者とのつながりも強化する必要性があるだろう。

今後の展開・反省点

感染者が日常生活を送るにあたり、何が必要とされていて、何が問題となっているのかを考えるとき、人びとのあいだにある HIV/AIDS に対する認識をめぐるギャップが大きな鍵となるだろう。今後は、このギャップがどのように生み出されているのかを、医療機関の取り組みと、人びとと医療機関とのつながりに注目しながら調査し、検討していく。そして、感染者が地域社会でどのように暮らしているのか、また、感染者を含む地域社会の構成員がどのように感染者と社会を捉えているのか明らかにし、感染者率の割合がもっとも高い南部アフリカにおいて、望まれる HIV/AIDS 治療のありかたを描き出したい。